

# 補習授業校における教育と経営の在り方

前ダービー補習授業校 校長

宮崎県都城市立乙房小学校 教頭 山下 久一

キーワード：補習校経営

## 1. はじめに

派遣先は、英国中部、イーストミッドランドにあるダービー補習授業校（ダービー日本人補習校）である。地域の紹介や、取り組んできた経営内容と補習授業校の在り方について、所感を含め述べていただくと。

## 2. 地域と補習授業校について

英国は、北アイルランド、スコットランド、ウェールズ、イングランドの連合国（正式名 UNITED KINGDOM OF GREAT BRITAIN AND NORTHERN IRELAND）である。ダービーは、その中央部を占めるイングランドのダービーシャーにあり、英国全体で見て中央部に位置する。産業革命の発祥の地域でもあるが、牧歌的風景が広がる緑豊かな地である。それでも「ジョンスメドレー」の工場のように、あちこちにその痕跡が残っている。

写真は、当時ダービーの発展に貢献したジョセフライトという人物の碑である。近くには、ロビンフッドの森もあるノッティンガムやバーミンガム、少し離れてマンチェスター、リバプール等の街がある。ナイチンゲールやシェークスピアの過ごした家も近い。ロンドンと異なり、この辺りは日本人は少なかったが、飛行機工場（エンジン生産部門）の関連企業の進出や、日本の自動車工場とその関連企業の進出により、派遣社員が在住するようになった。それとともに、その子女の教育が必要となり、ダービーシャーの支援のもと、平成3



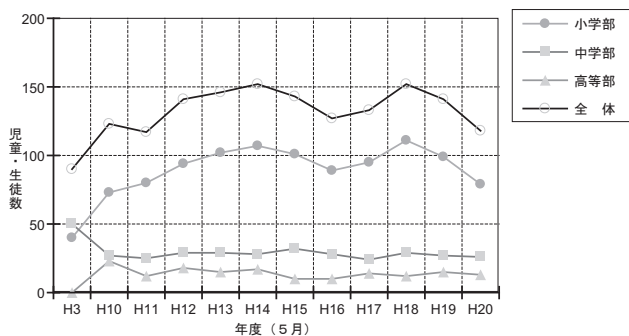
<ジョセフライトの碑>

(1991)年、現地在住者の子女も受け入れ対象としたダービー日本人補習校（以下、補習校と記す）が設立された。その支援と協力は、現在でも続いている。

設立当初は、小学部6学級40名、中学部3学級10名、計9学級50名であったが、翌平成4年4月には、小中学部9学級99名に高等部1学級8名が加わり、計107名になった。平成5年には文部科学省より派遣校長が着任し、自分で歴代6代目（派遣校長として5代目）であった。校舎はダービーシティの校外にあり、ダービーカレッジより各教室、食堂、会議室等、土曜日のみ借用している。（図書室兼職員室兼事務室は常時）

## 3. 子どもたちや保護者の思いや願い

通学範囲は、北はシェフィールドやリバプールの近く、南はバーミンガムの南のウースター近辺と、広範囲から車やバスで最大2時間近くかけてやってくる。月曜日から金曜日は現地校に通っていることもあり、負担も大きいですが、毎週楽しみに通ってくる。それは、日本語環境のもとで学び、話し遊ぶことができるからである。児童生徒数の推移は右図の通りであり、ここ



<児童・生徒数の推移>

数年は平成17年度133名、平成18年度152名、平成19年度141名と増減があるが、英国の他の地域と同様、減少傾向にある。

保護者の4/5程度は、短中期企業派遣者であり、残りは英国人との結婚による現地在住者や長期の現地滞在者である。その思いや願いは、主に日本の教育の維持や適応及び学校文化の体験にある。日本語環境の中で、日本型の教育を受け日本の教育内容の学力を維持できることが願いである。

#### 4. 抱える課題

補習授業校での教育は、個々の生育環境や生活経験が異なるため、日本国内以上に多様な指導力が求められる。ダービー補習校でも最大の課題は、国語力を含めた日本語力の育成と学力差への対応である。一人一人の持つ能力的な差はさほどなく優秀な児童・生徒も多いが、これまでの環境により、学習に対しての理解力や定着度に関心が見られ、指導を難しくしている。具体的には、主に次のような課題がある。

<児童・生徒>

- 日本語力が不十分な児童がいる。
  - ・幼少期に海外に出かけ、海外在住（英国や日本以外での生活）が長い。
  - ・両親とも日本人である（または日本語が話せる）が、英語に慣れ親しまそうと、英語力の育成に力を入れ日本語力の育成がなおざりにされた。
  - ・両親のどちらかが日本人でも、家庭での（子どもとの）日本語での会話が少ない。（この場合、子どもとの接触時間が多い母親が英語で話す時、とくに日本語力が育ちにくくなる。）
- 日本型の教育への適応に不安がある。
  - ・現地校での教育に慣れ親しんでいるほど、一斉指導や日本型の学習訓練に馴染みにくくなる。
  - ・海外滞在が長くなり現地の教育に適応していくにつれ、日本の教育内容を習得することが難しくなり、中には、そのまま英国の大学等へ進学しようとする子ども出てくる。
  - ・日本の高校や大学入試では、帰国子女枠があるとはいえ選択の幅が限られるため、保護者も含め、帰国してからの進路に対する不安も大きい。
- 現地校での学習が多忙になる。
  - ・セコンドリーになると、GCSE（イングランドの統一試験）に向け学習量が多くなり、補習校での学習まで十分手が回らなくなる傾向がある。
- 現地校での人間関係が持ち込まれやすい
  - ・同じ現地校に通う子がいると、数少ない同じ日本人どうして固まりがちである。その狭い人間関係の中で、狭さゆえのトラブルが発生し、それがそのまま補習校でも尾を引きがちである。

<講師>

- ダービーは地方都市であり、日本人が多くなく、教職経験のある講師の確保が難しい。
- 講師は主に、現地の大学講師、結婚による現地在住者、留学中の学生であるが、短期の滞在者（学生）もあり、長期の安定的な講師の確保が難しい。

<施設・設備>

- ダービー補習校の校舎は、幸い安定的に借用することができた。とはいえ借用校であるがゆえに、次のような課題を抱える。
  - ・施設、設備が、カレッジに通う学生向けに作られている。
  - ・どこも同じであると思うが、子どもの作品掲示等、常掲ができない。
  - ・図書を地域の日本人にも貸し出していることや、食堂を地域の日本人向けの日本食販売の場所として提供し

ていることもあり、安全管理の面で不安がある。

#### <備品・予算>

- 英国の文具類は、日本と比べると充実しておらず質もよくないところがあり、しかも高い。
- 書籍も含めて、指導用の教材教具が不十分であるが、副教材も含め日本からの取り寄せだと、高くつく。

#### <保護者や運営委員会>

- 補習校の、人的、物的、また予算的制約を理解されず、日本の公立学校の感覚で物事を判断され要求されがちである。また、自助努力の意味を理解されていない場合も多い。
- 運営委員会といえど、短、中期の派遣者が多く、補習校に対する理解が不十分である。
- まわりに合わせ軽い気持ちで入学させ、その後子どもの日本語力不足に気づき悩む保護者も見られる。

#### <地域との交流>

- 企業が地域交流を行っているところもあるが、補習授業校としての地域への働きかけが十分でない。

## 5. 手だて

これまであげたように、補習授業校での指導は、いかに日本の教育に適応できるようにするか。とくに、国語力をいかに育てるかが重要である。そこで授業の在り方を主にして、次のような手だてをとってきた。

- 授業の基本を守る。
  - ・ 授業を成立させる基本的な要素（時間、学習準備、態度、課題提示、発問、振り返り等）をしっかりと行う。
- 個に応じる指導を工夫する。
  - ・ 全体指導の中で、個に応じた指導の工夫（状況把握、課題提示、グループの活用、個別指導等）を行う。
  - ・ また講義型になりがちな授業を、児童・生徒が意欲的、主体的に活動できるように、グループ活動や調べ学習といった形態を工夫する。
  - ・ 個に応じた指導を重点指導目標や研修テーマに挙げ、全体での意識を高める。
  - ・ 運営委員会に要望し、個別支援講師を導入し、より個に応じた指導ができるようにする。
- 国語に関する行事を実施する。
  - ・ 国語の学習に対する意欲づけや心の育成を目指し、朗読会、書き初め大会等の行事を実施した。
- 現地校算数との関連づけを図る。
  - ・ 現地校算数（ジュニアスクール段階まで）について、カリキュラムを調べ、小学校算数の指導内容との関連づけと指導の重点化、効率化を図った。
- 職員の意識と技術の向上を図る。
  - ・ 意識と技術の向上のため、授業参観と指導を行い、テーマを設けた一人一授業の授業研修会も行った。
  - ・ 保護者の授業参観の他、運営委員会の授業参観や現地教師の参観を行い意識の向上を図った。
  - ・ 英国地区現地採用講師研修会へ代表講師を特別参加させ、他職員への啓発や資質の向上を図った。
- 保護者や運営委員会への啓発と相互理解及び連携
  - ・ 学校だよりを通して、補習校経営の方針や在り方を説明するとともに、保護者への依頼事項等掲載した。
  - ・ 保護者ボランティアを募り、諸行事等への協力を依頼するとともに、保護者への施設の開放を行った。
  - ・ 運営委員会や、学校参観等の機会を通して、経営方針や懸案事項について説明し運営委員会の理解を得ると



<参観日を兼ねた現地校講師参観の様子>

ともに、協力して事務の改善を行った。

- 借用校や地域との連携
  - ・15周年記念式典や修了証書授与式等に招待し、また、校内美化や安全管理等について協力依頼した。
  - ・地域の諸事情もあり、十分な連携をとるまでにはいたっていないが、手始めに、授業参観に児童・生徒の通う現地校の講師を招待した。また、フリーマーケットを行い、借用校にも声をかけた。
  - ・出向いて現地校参観を行い、日本の教育について説明するとともに、相互の理解を深めた。

## 6. 主な成果と今後の課題

### <成果>

- 基本的な授業の在り方や指導形態、個に応じた指導等、指導や研修を重ねることで、それぞれの指導技術の向上が見られ、落ち着いた授業が展開されるようになってきた。
- 個別支援の工夫や個別支援講師の導入等で、個に応じた指導がより充実してきた。
- 現地校の算数カリキュラムを把握することで、指導の重点化を図ることができた。
- 補習授業校の経営とともに、補習校でできること、保護者でできること、運営委員会で成すべき事等、啓発し続け、理解と協力を得ることができるようになり経営の安定化に繋がった。
- 関係機関を行事等に招待することにより、補習校に対する理解が深まり、さらなる協力が得られた。
- 参観等の交流を通して、現地校の状況を知るとともに本校への理解が深まった。

### <課題>

- 研修で指導技術を高めても2、3年で辞める講師もいるので、運営委員より、研修に関して費用対効果が得にくいのではないかと声が出る。研修の大切さを説明しつつも、講師の安定的な確保が望まれる。
- 個別支援講師の活用の在り方も含め、より個に応じた指導の在り方を、継続的に探っていく必要がある。
- 保護者、運営員会、関係機関等の理解が深まるように、継続的に啓発や交流等、努めていく必要がある。
- 保護者の多様なニーズにどこまで対応できるか、運営委員会と協議しさらに検討を重ねる必要がある。

## 7. 終わりに

海外に在住する日本人は、それぞれ自分で選択して国外に出ている場合が多く、その生活や子どもの教育については、自助努力が基本である。しかしながら子どもたちは、本人の意志ではなく保護者の都合で出ている場合がほとんどである。慣れ親しんだ学校や友だちと突然の別れをし、見ず知らずの異国の地に飛び込み、時として、日本人や日本語環境の全くない学校に行くことになる。それでも何とか英語や現地語を理解できるようになり、友達をつくり適応していく。さらに、慣れた頃にはまた日本に戻り、新たに完全な日本語環境や日本の学校文化に適応していかなければならない。時には、不適應症状が出ることもあるそのような過酷な環境に置かれる子どもの心中には察してあまりあるものがある。しかしながら、たくましく適応しその経験を糧に大きく成長していくのも事実である。ダービー補習授業校の子どもたちも、そのような子どもたちであり、将来、日本や世界で活躍するであろう優秀な素質を持った子どもたちであった。補習授業校は、日本の教育課程すべてを行う学校ではないが、その分、現地に溶け込み現地を理解した人材が育つので、今後の日本の発展にもきっと寄与するものと思われる。今後とも、それらの子どもたちにとってよりよい教育環境を整えてあげることが、我々派遣の使命であると思う。

最後になるが、この貴重な体験をさせていただいた文部科学省並びに外務省、及び宮崎県教育委員会、そして快く受け入れ支援していただいた英国政府並びにダービーシャー、ダービーシティ、ダービーカレッジ、補習校理事会・運営委員会、我が子がお世話になったチェリトリートーヒルインファント・ジュニアスクールを始めとした諸現地校、隣人等に、誌面ながら改めて心より感謝申し上げたい。